

---

# 鈍感娘と苦勞性男の噛み合わない関係

奈月葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈍感娘と苦労性男の噛み合わない関係

### 【Nコード】

N1305BA

### 【作者名】

奈月葵

### 【あらすじ】

ある男女の幼馴染のいまいぢ噛み合わない話。私にとって、幼馴染の智哉は異性というより、兄弟みたいなもの。あんまり長い時間一緒にいるから、もう以心伝心の関係だ。でも、最近、ある話題を出した時だけ、智哉の気持ちが変わるのだけどーこれって反抗期？ははは、まさかねー。そんな鈍感無邪気な女の子に振り回される苦労性ヘタレ男の色んな意味で、不憫な話。

異性同士の幼馴染って、男と女　というより兄弟に近いと思う。  
むしろ、いまさら異性として見るっていう方が無理な気がするのよ  
ね。

多分、お互いそうだと思うし、幼馴染　智哉には手のかかる姉扱  
いされてる気もする。ちなみに姉なのは、私の方が数カ月、誕生日  
が早いから。これは個人的に譲れない。  
まあ、どっちにしろ、アイツとは血のつながらない姉弟って感じで  
接してるし、これからも多分それは変わらないと思うんだよね。

「ねえ、智哉。アンタって今まで彼女いたことないよね？」

智哉の部屋でベッドに寝そべり、漫画を読みながら、私はふと漫画  
から顔を上げて、智哉にそう訊いてみた。すると、それに対して、  
智哉はあからさまに眉間にしわを寄せ、

「は？　何、急に」

と、低い声で私に尋ね返してきた。

あーあ、自分に都合悪くなったから怒ってるわ、と思わず内心で笑  
う。

「まあ、いいじゃない。で、ないよね？」

「　　ないけど。それが何だよ」

「だってさ、私たちって高校生よ？ 世間で言う、華の高校生？ってやつ。なのに、入学以来、ずっと“二人ともこんな”じゃない。だからさ、ふと、思ったわけ」

「ふうん」と気のない返事を寄越し、智哉は興味なさげに視線を手元の漫画本へと戻した。

しかしそのすぐ後、私が言った「私たちって枯れてるわよねえ」という言葉に、智哉は憤然と顔を上げた。

「枯れてる…？」

智哉の眉間のしわは、さらに深さを増していた。私はふふふと含み笑みを漏らしながら、智哉の眉間をゆるゆると撫でて均してやった。だって、しわって癖になるからね。智哉も案外眉間にしわ寄せること多いし、あくまでこれは私の好意によるものだ。…が、私の内面から滲み出るアタタカイ笑みが全てを台無しにしていたらしい。

智哉は鬱陶しそうに私の手を振り払った。でも、私は又ルイ笑みを止めない。だって、智哉の反応が面白いから。悪趣味だったことは、自分でも気付いている。

ちなみに私の言う“二人ともこんな”とは、今さっきからの私たちの状況を指す。つまり、学校が終わると直行でどちらかの家に行き、色気も無く二人で漫画や雑誌を読む、と、まあ、そんなところだ。

智哉は不貞腐れたようにそっぽを向くと、私を睥睨した。

「別に付き合ったことなかったって枯れてることにはなんないだろ。

…大体、告白はたまにされるし、俺だって付き合えるもんなら付き合いてえよ」

「告白されてるなら、その中の誰かと付き合えるじゃん。ホントに告白されてんの？」

「誰でもいいわけじゃねえんだよ。告白してきた子の中に付き合いたいと思える子がいなかったただけだし」

「ははん。見栄、張んなくたっていいって」

「見栄じゃねえし！ お前と一緒にすんな！」

「ほほう、私は今日、告白されたんですが？ 智哉さんと一緒にしないでくださいな？」

そう得意げに言うと、智哉は「はあ！？」と声を張り上げて叫び、目を丸くした。

そんなに私が、自分より最近告白されたことが悔しいのか。なかなか負け嫌いなところがある困った奴である。仕方なしに、私はその結末も付け加えてやった。

「ま、断わったけどね。タイプじゃなかったし」

「タイプじゃなかったって…」

智哉はしばらく忌々しげに唸った後、私の頭を力の限り小突いた。その衝撃に、目前に星が飛ぶ。

「痛あつ！ 何すんのさ、バカ！」

思わず奴に噛み付く。

婦女子の頭を力の限り殴るとは何事だ。男の風上のも置けん奴だ。

英国までは行かなくてもいいから、『男なら女に優しく』をモットーに紳士を目指せ。

そんな思いで智哉を睨むと、奴はいい気味だとばかりに、私を鼻で嗤い、

「お前こそ男に夢見過ぎなんだよ、バアカ」

と、私の男性観を一蹴してくれやがった。

智哉には私の男に求める理想像がモロバレだったりする。あとは、お互い頭の中が筒抜けだったり。一緒に居すぎた弊害だ。

かくいう私も、学校では清廉潔白、好青年で徹す智哉が、その実、内面エロエロなことを知っている。さらには奴のエロ本・エロビの隠し場所、しまいには奴のエロの傾向も知ってしまったている。

だって、ベッドの下とか、本棚の参考書の間とかに、本とかビデオDVDとか置いてあったりするんだもん！分かりやすすぎでしょう！目に着いちゃう私にどうしろと！？見つけちゃってから、そっと元に戻す女の子の気まずい気持ちをもっと理解してほしい。っーか、隠すなら、もっと分かりにくいところに隠してよね、まったく！ぷりぷりと怒りながら、智哉のエロ傾向　黒髪ロングの貧乳色白女子を頭に浮かべて、　そこで、ようやく本題を思い出した。さつき、智哉に彼女について聞いたのは、実は訳ありなのだ。

「あ、時にエロエロ智哉さん、耳寄りな話があるんだけど」

「誰がエロエロだ、おい」

「え、自覚なかったの？事実なんだから認めなよ。罪は認めてしまった方が楽に　って違う、そうじゃなくてっ」

あやうく、また話が逸れるところだった。危ない危ないと息を吐き、なるべく丁重かつ低姿勢をとる。ここが肝心だ、がんばれ、私！

「あのね、由美子知っているよね？」

「お前のクラスメートの？」

「そう。その由美子がアンタのこと、気になるらしいんだけどさ…」

メアド教えてあげてもいいかな、と訊くより前に智哉が大きく溜息をついた。え、何、いきなり。驚きに目をぱちぱち瞬いていると、ジト目でこちらを睨みつけた智哉が「無理。」とそれだけ言い

放つ。

それに慌てたのは私で。由美子から頼まれてるのに、そんな簡単には諦められない。それに由美子と智哉なら結構良いカップルになると思うのに、なんで奴はこんなスパツと一瞬で切って捨てたんだ。内心、首を傾げながら、智哉にしがみ付き、なんとかせねばと言いつつ募る。

「え、ちょ、決断早くない…？ 由美子いい子なんだよ？ もうちよつと考えても…」

「付き合いたいと思えないから。 お前から、断つといて」

「え……まだ、知り合ってもないじゃない。これから思うかもよ？ 付き合ってる子いないし、付き合う予定の子もないんでしょ？ だったら、いいじゃん。由美子、今フリーだけど、校内で人気あるの知らないの？ 性格もよし、顔もよし。こんな好条件の子、なかなかいないよ？」

「……………」

そこで黙った智哉はもう一度大きく溜息をつき、呆れ眼でこちらを見やった。それから渋い顔で髪の毛をがしと掻き、小さく舌打ちをした。智哉の機嫌はみるみる内に急降下し、今は底辺を低迷中。ここまで機嫌悪くなることって滅多にないのに、いったいどうしたというんだ。オロオロとしながら、智哉の顔色を窺う。

「え、何。なんでそんなに不機嫌になるの…？」

「……………。もういい。とにかく頼まれても無理なものは無理だから」

「えー、もつたいない…。由美子、アンタの好みでしょうに」

「…なんで俺の好みは分かっているのに、肝心なトコ、分っかんないかなあ…？」

「なんか言った？」

「なんも。とにかくごめんって断つといて」

にべもなく切り捨てる智哉に、不満ながらも頷いた。智哉が全く乗り気じゃないなら、この話はなかったことにするしかない。

あーあ、でも、ホントにもつたいない。私がかもし男だったとしたら、由美子と付き合えるなら、喜んで付き合うのに。智哉は由美子のどこが不満だつていうのよ。贅沢なのか、それとも…。

「智哉、やっぱり枯れてんじゃないの？」

「…っ！ ああもー！ だから、お前には言われたくねえよ、絶対対に！！」

ふーふーと興奮しきった様子で、智哉が私に怒鳴る。

ホントになんでこんなに怒ってんの、コイツ。尋常じゃない智哉の怒りに、困惑した私は「ちよ、落ち着きなよ、ね？」と智哉を必死に宥めようとす。と、それまでいきり立っていたはずの智哉は途端にしゅるしゅると気落ちし、やがて肩を落としながら「もうやだ、なんなのコイツ…」と力なく首を振った。

「ホントごめんって、ね？」

「謝るくらいなら、いい加減俺の気持ち気付くか、なんかしろよ…」

意気消沈した智哉が、何事か呟いたが、生憎それは小さすぎて私の耳には届かずに終わった。

以心伝心で兄弟みたいなたちだけど、ときどき私には智哉が分ん



なくなるときがあるのよね。

もしかして、反抗期？ お姉さまに逆らいたいお年頃？ ははは、  
なんつってー！。

と、私が呑気に笑ってる横で、智哉が私の鈍さに頭を抱えていたな  
んて、

全く想像だにしなかったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1305ba/>

---

鈍感娘と苦勞性男の噛み合わない関係

2012年1月3日05時47分発行